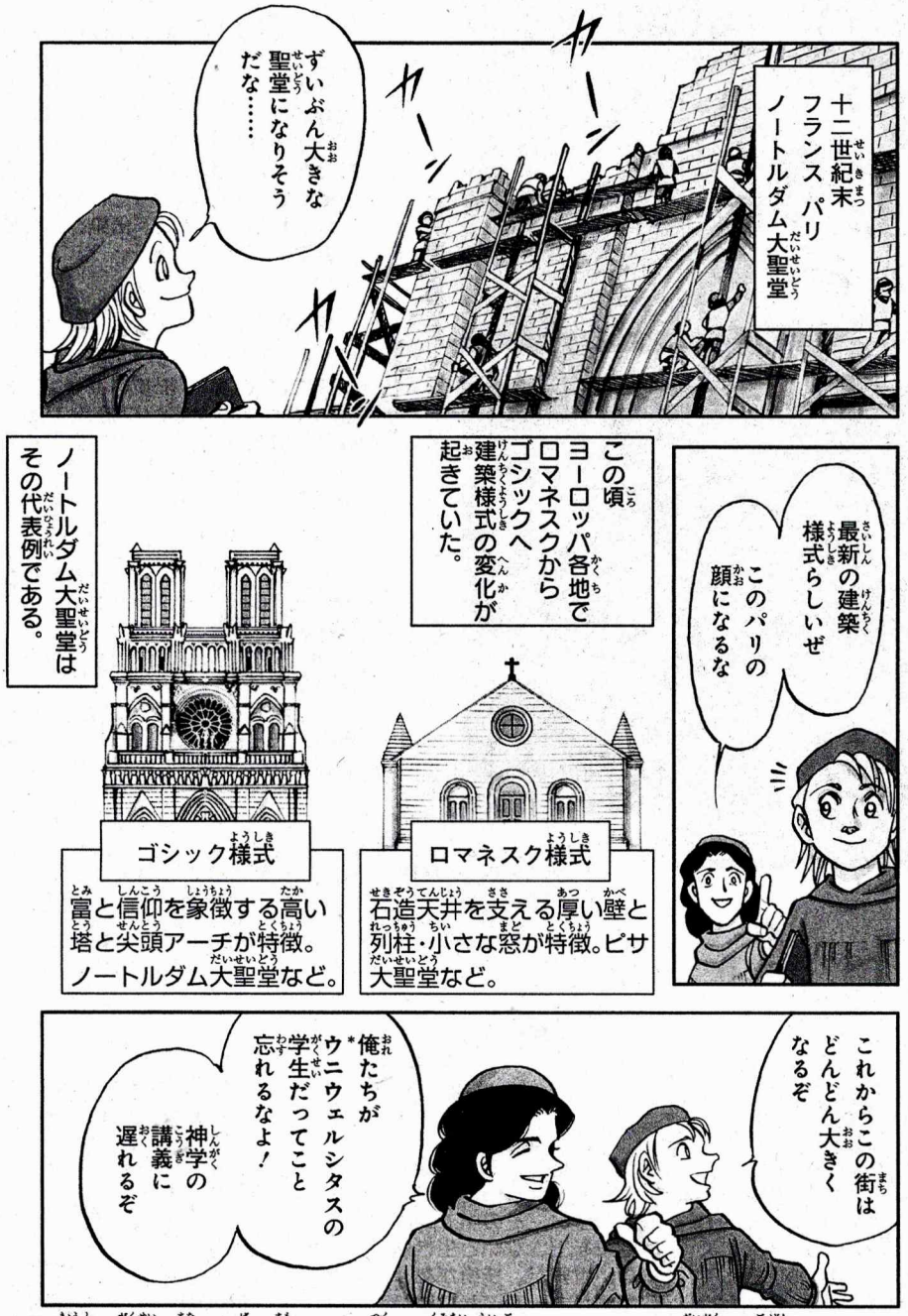
■ Culture



＊教師と学生が学びの場を守るために作った組合。英語のユニバーシティ(大学)の語源となった。

角川まんが学習シリーズ「世界の歴史6　モンゴル帝国と東西交流」©KADOKAWA CORPORATION 2021　社会が安定化する中で、都市が発達した中世ヨーロッパでは、ロマネスクやゴシックといった新たな美術が生まれた

最新技術駆使し修復

12～15世紀にはロマネスク様式に代わり、高い尖塔に華美なステンドグラスで装飾された、ドイツ・ケルン大聖堂などに代表されるゴシック様式が流行する時代を迎える。

ゴシックも19世紀以前は栄光の古代とルネサンスの間の「暗黒の中世」を象徴する「野蛮」な芸術との評価だった。中央大の泉美知子准教授（19世紀フランス美術史）は「人間の体に基準を置き、規則的・理性的な美を求めた古代に比べ、ゴシックは過剰で不安定とみなされた」と指摘する。

だが、19世紀前半に中世の美を再評価する「ロマン主義」が流行。特に18世紀末の革命の影響で貴重な建物の多くが破壊されたフランスでは、1830年に「歴史的記念物」を国家主導で保護する制度が始まった。その象徴的な動きとして知られるのがパリ・ノートルダム大聖堂の復興だ。

12世紀後半に造られた大聖堂は革命以降、荒廃していた。1840年代、再建にあたった建築家ビオレ・ル・デュクは尖塔の高さを破壊された従来よりも10㍍以上高い96㍍とし、自身の想像による怪物像も取り付けた。その意匠の是非は20世紀以降も議論され続けてきた。

●

ノートルダム大聖堂は2019年に火災に見舞われた。焼け落ちた尖塔の再建にあたり、フランス政府は当初、国際コンペでデザインを選ぶとしたが、最終的に火災前の姿に戻す方針に転換した。泉准教授は「デュクの尖塔も時を経てパリの象徴として評価されるようになった。現存する中世の美術・建築は19世紀の遺産でもある」と強調する。

今回の修復の過程では、石材同士を固定する「かすがい」として、創

＊ 歴史研究が深まるにつれて世界史のトピックは見直されています。「世界史アップデート」では、研究成果を反映した最新説を、広く知られた従来説と比較しながら紹介します。「日本史アップデート」と隔週で掲載する予定です。